

## 第6章 浦尻貝塚の歴史的意義

### 第1節 浦尻貝塚と福島県内の貝塚

#### 1. 福島県内の貝塚調査の歴史

福島県における貝塚の発見1877年（明治10）、モースによる東京都大森貝塚の発掘調査は、我が国における科学的考古学調査の最初の事例として学史に記録される。この調査によって、大森貝塚が石器時代の遺跡であることが明らかにされ、後の縄文時代研究の先駆けとなったことは広く世に知られるところである。

福島県内の貝塚の調査は、大森貝塚の発掘調査から13年後の1890年（明治23）、若林勝邦らによつて行われた、相馬郡新地町に所在する新地貝塚（国指定史跡、小川貝塚と称したこともある）の調査が最初の事例とされる（若林1890）。この調査を契機に、当時東京人類学会に籍を置く福島県在住の会員らによって、福島県内での貝塚の確認調査が行われた。後に東京大学や日本考古学協会によって調査され、多くの人骨が出土したことで知られることになった新地町三貫地貝塚は、若林を新地貝塚に案内した、当時中村（現在の相馬市）に在住した館岡虎三が発見し、明治27年に『東京人類学会雑誌』に報告した貝塚である。

**小高町における貝塚の発見** しかし、館岡の浜通り地方の石器時代遺跡の確認調査に先行し、早くも新地貝塚の調査が行われた同じ年の8月、小高町片草に所在する片草貝塚を発見し、『東京人類学会雑誌』に報告したのが、当時福島県尋常中学校の教員であった犬塚又兵衛であった。記録で見る限り、小高町内の遺跡では学会に報告された最初の貝塚である（犬塚1890）。

1901年（明治34）、東京帝国大学人類学教室の大野延太郎は、磐城線（現在のJR常磐線）の全線開通を契機に福島県浜通り地方の遺跡調査を行った。大野はこの調査で小高町浦尻にある台ノ前貝塚を調査し、その成果は「磐城線十日の旅」（大野1901）で報告した。この報告にある台ノ前貝塚が今回報告する浦尻貝塚にあたることは、前に触れたとおりである。

小高町内の貝塚は、犬塚や大野の報告により考古学会に知られことになったが、その後の調査状況には不明な点が多い。しかし、1959年（昭和34）の酒詰仲男による『日本貝塚地名表』には、小高町内の貝塚として、片草貝塚・角部内貝塚（現角部内南台貝塚）・台ノ前貝塚（現浦尻貝塚）・西向貝塚（現浦尻貝塚）・上浦貝塚（現宮田貝塚）の5遺跡が収録されているので、この間に町内の貝塚に対する所在確認調査が、識者によってある程度行われたものと考えられる。

**小高町内の貝塚の調査** 県内の貝塚の調査は、大正末期に行われた新地貝塚や三貫地貝塚の調査が学史的には著名なものであるが、戦後はいわき地区で大学や地元研究者によって行われた積極的な調査がある。しかし、小高町内の貝塚は、古くは明治期に知られた貝塚があり、またその数も決して少ないものではないにもかかわらず、研究者によって大きく取り上げされることもなかったことに大きな特色がある。

町史編纂事業による宮田貝塚の発掘調査（竹島國基1975）、福島県学生考古学会や福島大学考古学研究会による西向貝塚の発掘調査（福島大学考古学研究会1971）、崖面崩落に伴う角部内南台東貝塚（玉川・吉田1988）の発掘調査などが過去の調査としてあげられるが、これらは小規模な調査であつて、小高町内の貝塚の詳細を明らかにするものではなかった。このような背景に加え、町内の貝塚は

幸いにも大きな開発の波にさらされることなく近年に至った。浦尻貝塚を含め、小高町内の貝塚が、その多くが掘り散らかされることなく、いずれも良好に保存されている理由はここにある。

## 2. 福島県内の貝塚の分布と小高町内の貝塚

福島県内の貝塚については、『福島県の貝塚－県内貝塚詳細分布調査報告－』（福島県教育委員会 1991）が最新のデータを提供している。ここには貝層を確認できない遺跡も含まれるが、全県で55遺跡が収録されている。このうち会津盆地内に所在する淡水産貝塚3遺跡以外は、南からいわき市・双葉町・浪江町・小高町・相馬市・新地町の2市4町の太平洋沿岸部に分布が確認できるが、その分布には空白地域があって、いわき地区の貝塚群（30遺跡）・双葉北部から相馬南部の貝塚群（16遺跡）・相馬北部の貝塚群（6遺跡）の3つのブロックに分けることが可能である。

**いわき地区的貝塚** 蝶田川・藤原川・小名川・滑津川・夏井川・仁井田川・浜川流域の段丘面を中心に分布するが、分布の中心は小名浜湾に流入する藤原川流域にある。この地区的貝塚の特色は、夏井川流域の弘源寺貝塚が縄文前期初頭の貝層をもつ以外は中期以降の貝塚であること、外洋に面した丘陵や段丘に立地する貝塚が貝層の厚い堆積層を形成し、外洋性漁労活動を示す優れた骨角器が出土することなどをあげることができる。

**双葉北部から相馬南部の貝塚群** 相馬郡北部は小高町の貝塚群を含んだブロックである。前田川・請戸川・宮田川・小高川の流域の段丘面を中心に分布する。貝塚の形成が縄文海進期の前期に始まる貝塚が多いこと、また自然遺物や漁労具が内湾性漁労活動を示している点が特色である。分布の中心は小高町の宮田川と小高川の流域にある。

**相馬郡北部の貝塚** 松川浦に流入する宇田川・日下石川流域と、旧新沼浦に流入する立田川、濁川の流域に分布するが、松川浦流域の貝塚は小規模で、また古墳時代から奈良・平安時代の貝塚がほとんどと考えられている。立田川流域の三貫地貝塚と濁川流域の新地貝塚は、いずれも低位の段丘面に立地すること、貝層が縄文後・晩期に形成された内湾性の漁労活動を示す貝塚であるという共通した特色がある。

福島県内の貝塚は、縄文時代の貝塚文化の大きな拠点であった東京湾・霞ヶ浦周辺地域と松島湾周辺地域との、中間地帯に分布する貝塚として重要な位置関係にある。この地域の貝塚研究は、県内の貝塚文化の形成における関東地方や東北地方の文化的関連を明らかにする大きな可能性を秘めていることは明白であり、今後の調査・研究に期待される。

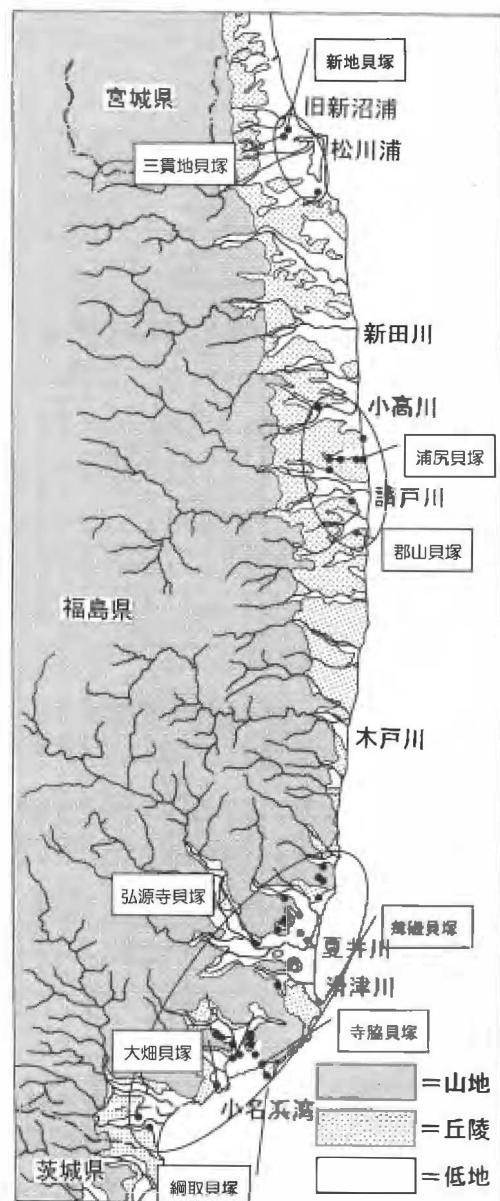


図173 福島県浜通り地方の貝塚の分布

### 3. 小高町の貝塚

『福島県の貝塚－県内貝塚詳細分布調査報告－』には、小高町内の貝塚遺跡として13遺跡が収録されている。しかし、これらの遺跡は貝層が確認されない遺跡を含んでいることや、集落遺跡内の地点貝塚を単独に取り上げているなど、遺跡として貝塚をとらえるには課題がある。立地する遺跡の地形などを考慮すれば、次の2つの水系にある7遺跡として考えるのが現状では最も理解しやすい。

**宮田川流域の貝塚** 旧井田川浦を含んだ宮田川下流域の南側丘陵地にある貝塚で、4カ所の貝塚遺跡としてとらえることが可能である。

- ①北原貝塚（仮称）：浦尻字北原地区の貝塚で、北原貝塚群・北原西貝塚が台地の東と西の斜面に形成されている。台地部を居住域とした一つの遺跡と考えるべきであり、北原貝塚と仮称する。西貝塚にはイボキサゴを主体とする縄文前期前葉の貝層があり、台地の東側の斜面の貝塚では、詳細は不明だが、前期を中心に中期まで断続的に貝層の形成が行われたと推定される。
- ②浦尻貝塚：今回調査した貝塚で、浦尻字南台・台ノ前・西向・小迫地区に分布する4カ所の貝塚で構成される。縄文前期後葉から中期・後期・晩期の各時期に貝層が形成され、小高町内の貝塚では貝塚の形成時期が最も長期にわたる。
- ③加賀後貝塚：上浦字加賀後地区の低位段丘面の北側斜面に形成された貝塚で、貝層の下方は現在の水田面下に埋没している。小高町内の貝塚では、最低位のレベルに形成された貝塚である。貝層はイボキサゴを主体としていて、縄文前期前葉の比較的短期間に形成されたものと考えられる。
- ④宮田貝塚：上浦字宮田地区の段丘面の東端にある貝塚で、東・北・西の3カ所の斜面に遺物包含層があり、東側の遺物包含層にイボキサゴを主体とする貝が含まれているのでこの地点を宮田東貝塚と称している。縄文早期末葉から前期末葉の土器が出土しているが、貝層の形成時期は前期前葉の短期間と考えられる。宮田川流域の貝塚では最も内陸に位置する貝塚で、現在の海岸線からは約4.2kmある。

**小高川流域の貝塚** 小高川の下流域にある貝塚で、南側の丘陵地に2カ所、北側の段丘端に1カ所の貝塚が知られている。小高川下流の村上地区には、旧前川浦の名残りの潟湖がある。

- ①角部内南台貝塚（仮称）：角部内字南台地区の貝塚で、段丘面東側斜面の東貝塚と南側斜面の南貝塚に分けられているが、これらは中央の段丘面を集落の中心として斜面に形成された貝塚であり、遺跡としては1つに数えるべきである。角部内南台貝塚と仮称する。出土する土器には、縄文前期前葉から中期末葉の各型式が含まれるが、アサリを主体とする貝層は中期に形成されたと推定されている。
- ②小谷津貝塚：泉沢字小谷津地区にある貝塚とされる。小高川の支流である泉沢川の開析谷の南端の段丘面に立地するが、竹島國基の表面調査の結果以外に、貝層に関する詳しい情報がない。現在は貝層の存在も含めて不明といわざるを得ない。
- ③片草貝塚：片草字金場台にある貝塚である。小高川の北岸の段丘面の東端に集落遺跡があり、その東斜面に貝層が形成されている。貝層はアサリを主とし、縄文前期中葉の大木2式の短期に形成されたとみられている。現在の海岸線からは西に約4.3km内陸にあり、小高川水系の貝塚としては最も内陸に残る貝塚である。

小高町内の貝塚遺跡については、以上のように2水系の7カ所の遺跡群として整理することができる。発掘調査が実施されていない貝塚が多く、貝層の広がりや内容、また貝層形成の時期などに不明な点があるが、現在の限られた情報だけでも、縄文海進を含めた縄文時代の自然環境の復元などが可

能である。前述したように、小高町内の貝塚は、その大半が未調査の状況にあり、このことは将来における貝塚の考古学的研究に大きな可能性を残している点も高く評価されるべきである。

小高町内の貝塚は、北原貝塚（仮称）・加賀後貝塚・宮田貝塚・片草貝塚などのように、縄文前期前葉に貝層が形成される。これは双葉町郡山貝塚や浪江町植畠貝塚などとともに、双葉北部から相馬南部の貝塚群に共通する特徴であって、貝塚の形成が遅れるいわき地区や相馬北部の貝塚とは大きな違いをみせている。

## 第2節 浦尻貝塚の調査の成果

### 1. 浦尻貝塚の貝層とその特色

平成12年度から実施された浦尻貝塚の5ヶ年にわたる発掘調査は、その契機が遺跡内に計画された道路建設による確認調査であったが、初年度の成果を受けて、13年度以降は国史跡指定をめざした範囲確認調査として実施された。このため、調査はトレーンチによる部分調査が選択され、特に貝層はその分布範囲を確認することに主眼が置かれ、貝層そのものの調査は最小規模で実施した。したがって、遺跡全体の中での遺構の分布や数、貝層の詳細な堆積状況などは、大まかな情報しか得られなかった。制限された調査であったが、その成果から主な点をまとめてみたい。

**貝塚の形成時期** 浦尻貝塚には、台ノ前北貝層・台ノ前南貝層・西向貝層・小迫貝層の4カ所の貝層が所在することが明らかになった。これらの貝層はいずれも段丘の斜面に形成された貝層であり、いわゆる斜面貝塚に含めることができある。上位部の段丘平坦面が集落の居住域であったことは、検出された竪穴住居跡などの遺構のあり方から明白である。

貝層の形成年代は、台ノ前（北・南）貝層が縄文時代前期後葉から中期後葉、西向貝層が中期前葉から後期前葉、小迫貝層が晚期前葉から中葉にかけての時期と考えられた。中期末葉と後期中・後葉の貝層が欠落しているが、一つの集落遺跡の全体としては前期末葉から晚期中葉までの長期間にわたる貝層の形成が行われていて浦尻貝塚の大きな特色となった。このことは、福島県内の他の貝塚にみられない特色であり、また浦尻貝塚が縄文時代におけるこの地域の拠点的な集落であったことを考えさせる理由でもある。県内の縄文遺跡の中で、これほど長期間にわたり集落として土地利用された遺跡は、浦尻貝塚の他に類例をあげることができないのである。

台ノ前北貝層は、最下層が大木3・4式期から貝層の形成が始まることが明らかになった。福島県内の貝塚では、いわき市弘源寺貝塚や小高町北原貝塚（北原西貝層）・上浦加賀後貝塚・上浦宮田貝塚・片草貝塚で前期前～中葉の貝層が確認されているが、前期後葉の貝層は、台ノ前北貝層が県内の貝塚では最初の発見例であり、年代的にも重要な意義がある。また、前期末～中期初頭の貝塚も県内ではほとんど類例がない。

**貝層の特色** 4カ所の貝層のうち、台ノ前（北・南）貝層と西向貝層の前期後葉から後期前葉の貝層はアサリが主体となった貝層であるが、晚期の小迫貝層はアサリが減少してイソシジミ・ヤマトシジミが卓越する貝層であることが明らかにされた。大きな動向として、バックグラウンドとしての旧井田川浦の環境が、縄文海進期の砂質干潟を伴う内湾から徐々に潟湖化した状況を示す所見である。詳しい動向は、魚類の組成の変化とあわせて第4章に概要がまとめられているが、宮田川流域の他の貝塚調査が進展し、自然遺物の詳細な比較が行われれば、さらに具体的に旧井田川浦の古環境の変遷が記述可能になるであろう。

浦尻貝塚の貝層のもうひとつの特色は、貝の混入密度が比較的小さく、いわゆる純貝層が形成されず、土を多量に含んだ混貝土層や混土貝層が分厚く堆積していること、また動物遺存体の中でも魚骨が大量に出土したことである。この特色は台ノ前（北・南）貝層と西向貝層に特に顕著であり、Bタイプとした多量の土を含んだ堆積層の形成は、後述するように居住地区と想定される台地部の地山掘削の行為との関連が想定される。魚骨の豊富さも県内の他の貝塚に類をみないあり方であり、動物遺存体全体を含めて浦尻貝塚人の生業や周辺環境の変化を考える格好の資料となった。浦尻貝塚の遺跡としての価値の高さを示す特色ともいえよう。

**縄文時代の地山掘削** 集落遺跡としての浦尻貝塚の構造を知るために南台地区の台地上に設定したトレンチ調査では、南台地区台地北部に地山のローム層が欠落し、地山面がくぼ地を呈する地形の変化を確認したことも大きな成果であった。このくぼ地は縄文前期後葉のⅡ期から始まった竪穴住居などの遺構の掘削や、前期末葉から中期初頭のⅢ期に特に盛んに行われたと考えられる遺構掘削などによって形成された地形の変化であって、掘削に伴う土の廃棄は台地の東・西斜面に行われたものと理解された。台ノ前貝層と西向貝層に、多量の土を含んだ混貝土層・混土貝層が厚く堆積しているのは、これらの地山掘削行為が直接の原因であったと考えざるを得ない。

縄文時代の集落遺跡では、集落の中央部を掘削しくぼ地を形成する事例や、中央のくぼ地を掘削し出土を周辺に盛土した事例が増えている。栃木県寺野東遺跡や千葉県三輪野山貝塚など、関東地方の縄文後期の集落遺跡に類例が多いが、宮崎県本野原遺跡も後期の同種の集落遺跡である。これらは縄文時代における大規模な土木工事が行われた集落として位置づけられているが、浦尻貝塚はこれらに新しい事例として加わることになった。

**出土した遺物** 浦尻貝塚の確認調査では、貝層や遺構の部分的な調査であったにもかかわらず、多種多量の人工遺物・自然遺物が出土した。その内容や詳細な観察と分析は今後の課題として残されているが、特色をまとめれば以下のようになろう。

まず、縄文土器では早期後葉から晩期大洞A式までの多くの型式の土器が大量に出土した。量的なまとまりをもつものは、台ノ前（北・南）貝層の大木6・7a・7b・8a・9・10式、綱取式の前期末葉から後期前葉の土器群と、小迫地区の貝層や遺物包含層から出土した晩期大洞BC・C1・C2式土器群である。特に大木6・7式土器は、福島県内では最もまとまった土器資料になったものと考えられる。これらの土器は、文様構成などに松島湾を中心とした東北南部地域に共通する特徴が認められ、この地域が大木系土器文化圏の決して外縁地域ではないことを確認することができた。分層された貝層ごとの詳細な検討が行われれば、体系的な型式変遷が明らかになるものと期待される。

小迫北地区では、西の谷の遺物包含層と東の谷の小迫貝層から多量の亀ヶ岡式土器が出土している。中心となる大洞BC・C1・C2式土器では、BC式の精製土器に縄文帯が付加されたり、地文に横回転の結節縄文が施されるなど、福島県地域の特色が色濃く表れている。詳細な文様の検討、組成の検討が進めば、亀ヶ岡式土器の地域的特色がより鮮明になるものと思われる。

小迫地区の貝層・遺物包含層には大洞各型式の土器に混じって、多量の製塩土器が出土していて、浦尻貝塚人の生業の一端を明らかにする成果もあった。小迫貝層から製塩土器が出土すること、その年代が大洞C2式期と推定されることは既に報告されたことではあった（玉川1986）が、今回の調査で、共伴する土器から大洞C2式期は確実で、大洞C1式期に遡る可能性があることが明らかになった。小迫北地区の低地には、土器製塩の場との関連を解明する目的でトレンチを設定したが、今回はその関連を明らかにはできなかった。旧井田川浦周辺の縄文時代の製塩遺跡としては、浦尻貝塚の東約

800mの地点に位置する磯坂遺跡が知られており、表面採集での所見ながら、ここでの土器製塩は晚期後葉の時期が推定されている。小迫地区の製塩土器は、この地域での土器製塩がより早い晚期中葉に始まることを確実にした。

なお、小迫地区の西の谷・東の谷の遺物包含層の下層には、後期中葉から後葉にかけての加曽利B式・新地式が多く含まれることが明らかになっている。小迫地区の集落の在り方や、この地域における後期中葉・後葉の土器変遷を考える上で重要な情報が眠る包含層である。

貝塚の調査であったので、骨角器などの人工遺物の出土にも大きな期待が寄せられていたが、この成果は必ずしも大きなものにはならなかった。貝層の調査が極めて限定された範囲の中で実施されたことが最大の理由であるが、骨角器が大量に出土しないのは、むしろこの貝塚の特色の一つともいえるのではなかろうか。それでも、漁具としての釣り針・刺突具や装身具など、貝塚ならではの人工遺物が出土し、動物遺存体などとの関連から浦尻貝塚人の狩猟・漁労活動を考える若干の手懸かりになった。この貝塚での漁労活動については、今後の魚骨などの詳細な分析によって具体的な内容が明らかになるものと期待される。

## 2. 浦尻貝塚の変遷

浦尻貝塚の調査の成果をもとに、本文では集落の変遷を7期に分けてまとめたが、遺跡全体の変遷と土地利用の関連を、主だった時代・時期に分け簡単にまとめれば、以下のような特徴をあげることができよう。

**縄文前期前葉** 浦尻貝塚において集落が形成される可能性が指摘される時期である。具体的な遺構は検出されていないが、小迫北地区の北斜面に遺物包含層が形成されているので、この地区的台地平坦面に居住区域が残されている可能性がある。

**縄文前期後葉** 南台地区の北側台地部が集落遺跡の中心地に選ばれ、東側斜面の台ノ前北貝層に最初の小規模な貝層が形成される。浦尻貝塚の集落遺跡としての本格的な土地利用が開始された時期ということができる。大木3～4式期にあたる。

**縄文前期末葉** 南台地区の台地北側が集落の中心にあり、大木5式期から竪穴住居が構築される他、大木6式期から東側斜面の台ノ前北貝層に、貝・獸骨の投棄とローム層の掘削土の廃棄が行われる。居住区域は台地北側平坦面にあったと推定されるが、この後に活発化した中央部の地山掘削行為により、遺構の多くが消滅したものと考えられる。

**縄文中期前葉～中葉** 集落の中心は南台地区の台地北側部分にあり、東側斜面の台ノ前北貝層と南貝層の形成が継続する一方、西側斜面に西向貝層の形成が開始される。また、台地中央部には貯蔵穴が群をなす貯蔵区域が成立する。居住区域は台地北側のくぼ地部分にあったと考えられるが、継続された地山掘削行為により住居遺構などは破壊され、明確ではないものの、居住区域・捨て場・貯蔵区域が集落内に分化するのがこの時期である。

貝層には大量の貝・獸骨・魚骨の投棄が行われる他、特徴的な土の大量廃棄も継続され、浦尻貝塚人の生業活動が最も活発に展開された時期と評価できる。大量の土の廃棄は、台地中央部西寄りの地点にくぼ地を形成するほど大規模なものであり、この事実は集落内で長期継続的に実施された土木工事があったことを明らかにし、浦尻貝塚の重要性を大きなものとした。

大木7式期が最も活発であった貝層の形成は、西向貝層では大木8a式期、台ノ前北貝層は大木8b式期で終了する。

**縄文中期後葉** 台ノ前南貝層の形成も大木9式期で終了する。この時期は南台地区の北側で続けられた地山の掘削行為も行われなくなり、くぼ地を中心とした複式炉をもつ竪穴住居による居住区域が明確に認められる。台地の中央部には引き続き貯蔵穴群が配置されるが、台地の東端の小迫南地区に共存したと考えられる居住区域が成立することが大きな特徴である。

南台地区北側のこの時期の竪穴住居は、長期の掘削により形成されたくぼ地の周縁に分布していて、窪地を中心とした環状の住居配置があった可能性の高いことが指摘されている。浦尻貝塚の遺構では、この時期の住居跡などに保存状態の良好なものが多い。

**縄文後期前葉～中葉** 中断していた西向貝層で貝の廃棄が再開されるが、綱取式期の短期間で終了する。以後、南台地区の貝層（台ノ前北・南貝層・西向貝層）では、貝層の形成が復活されることはなかった。綱取式期では竪穴住居が検出されていて、この段階までは前代までの居住区域が踏襲されていたものと考えられるが、柱穴が増えている、掘立柱建物が併存した可能性もある。

加曾利B式期になると、南台地区ではくぼ地部に墓と見られる墓壙が少数みられるが、住居遺構や貝層の形成もなく、この地区では集落の居住地域を形成する状況になかったものと推測される。

しかし、南台地区のこのような状況に対し、小迫北地区では東の谷と西の谷の下層に、加曾利B式と後期後葉の新地式土器を含んだ遺物包含層が形成されること、また台地中央部の平坦面から掘立柱建物跡とみられる遺構が検出されることなどから、後期中葉以降は、この遺跡の集落の中心が小迫北地区に移動したものと考えられる。南台地区のくぼ地部の墓壙は、この時期に小迫地区集落の墓域として土地利用されることになったものとも理解できよう。

**縄文後期後葉** 南台地区では土器片がわずかに採集されるだけで、生活の直接的な痕跡が消滅する。

小迫北地区の遺物包含層や柱穴の一部が新地式期の遺構と考えられ、この時期は加曾利B式期に継続して小迫北地区に集落が形成されていたとみられる。

**縄文晩期前葉～中葉** 南台地区には生活の痕跡がなく、小迫北地区に集落が継続して営まれ、小迫貝層が形成される時期である。居住区域は小迫北地区台地の中で、東側・西側に北側斜面から入り込んだ狭い谷を控えた平坦部が中心になった区域で、大洞BC・C1・C2式期の掘立柱建物が主体となつた遺構群がある。平坦面は後世の削平があって、竪穴住居は残存しない可能性がある。

小迫貝層は、大洞BC～C2式期に形成され、C2式期には確実に製塩土器が供伴している。この時期には、台地の下方の旧井田川浦周辺で土器製塩が行われたことが確実であるが、製塩場の特定はできなかった。

**縄文晩期後葉** 小迫地区を含めた浦尻貝塚では、晩期後葉の大洞A'式期以降の土器資料は急激に減少することから、この台地における縄文時代の人々の生活は大洞A式期をもって終わりを告げ、新たな拠点での営みが行われたものと考えられる。

**縄文時代以降** 浦尻貝塚のある南台・小迫地区の台地部からは、弥生土器もわずかに採集されるが、生活の痕跡となる遺構は確認できない。しかし、南台地区の台地部には、古墳時代後期になって古墳が築造され、新たな墓域としての土地利用が行われる。3基の円墳からなる浦尻古墳群として遺跡地図に登録されているが、今回の確認調査によって、墳丘を失った周溝だけが残る2基の円墳が新たに確認された他、台地の北端の高まり（4号墳）も方墳である可能性が指摘されている。1965年（昭和40）、1号墳が農道建設により破壊され、凝灰岩製の剖抜石棺が発見されているが、今回の調査で確認した5号墳は、墳丘のほぼ中心に土坑があり、内部に凝灰岩の腐食部が見えており、これも剖抜石棺を埋葬している可能性が強い。未調査のまま埋め戻したが、周溝からは6世紀中頃の土師器が出土

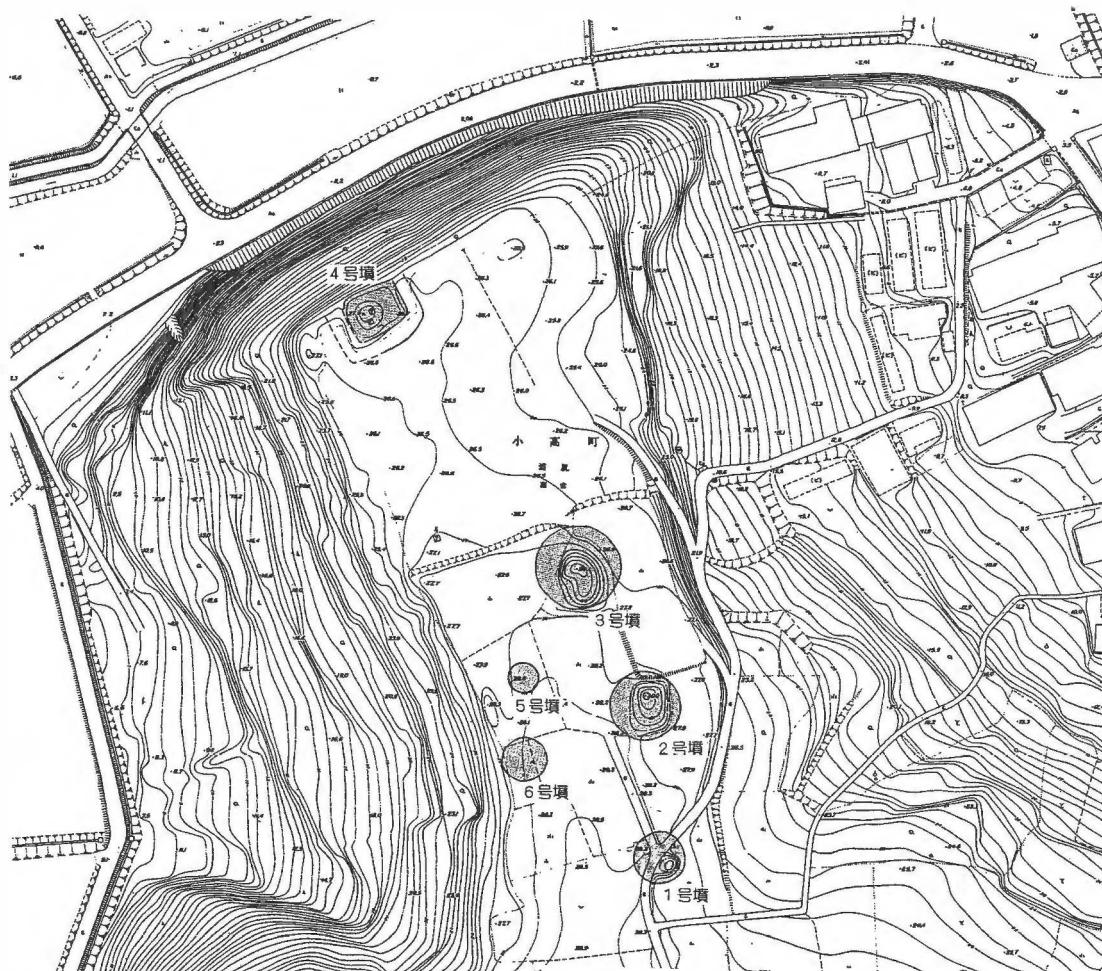


図174 浦尻古墳群の分布 (S=1/2,000)

していて、この古墳群が後期群集墳であることは明確である。地域の古墳時代を考える上で貴重な古墳である。

南台地区の台地部のトレンチからは、平安時代の竪穴住居も検出されている。この時期に集落が営まれたことを確認したのも今回の大きな成果であった。また、遺跡がある南台地区は、中世は標葉氏の支配地であり、『奥相誌』「浦尻村」の項に、「古館址 南台にあり。土人相伝う、佐藤越前の居址なり。」と記された中世城館跡とも考えられている。今回の調査では、確実な中世遺構・遺物は検出されなかったが、今後の調査においては、遺跡の全域を館跡として検証することも重要な課題である。

### 第3節 浦尻貝塚と周辺遺跡との関連

浦尻貝塚は、宮田川下流域の、旧井田川浦の南岸の台地に立地する縄文時代の貝塚であるが、調査の成果で触れられているように、流域の縄文時代の遺跡の中では、長期間にわたり集落が営まれた遺跡として重要性が指摘されている。

しかし、この流域には、隣接する請戸川や小高川流域を含め、同時代の貝塚遺跡や貝層をもたない集落遺跡が点在していて、浦尻貝塚の歴史的重要性は、これらの遺跡との関連の中で評価されなければならないものもある。同時に、浦尻貝塚の評価は、宮田川流域の縄文時代の環境、とりわけ内湾（古宮田湾）や潟湖（旧井田川浦）などの環境変化との関連の中でまとめられなければならない。調査された遺跡が少數であるという制約があるが、現時点で考えられる遺跡の関連を簡単にまとめてみたい。

**宮田川流域での縄文文化の始まり** 宮田川流域が内湾化する時期については、縄文海進との関連で説明しなければならないが、現段階ではその具体的動向は不明である。しかし、北原貝塚では縄文早期初頭に位置づけられる押型文土器が採集されたり（志賀1985），早期後半の条痕文系土器は各型式が採集されるなど、流域では早期から人々の活動があったことは否定できない。

**縄文海進と貝塚の形成** 前期前半の大木1・2式期になると宮田川流域では北原貝塚西貝層・加賀後貝塚・宮田貝塚で貝層が形成される。同様な動きは、南に請戸川流域の植畠貝塚、北の小高川流域の片草貝塚にも認められ、双葉北部から相馬南部地域の貝塚の特色であることは前述したとおりである。これらの貝層はイボキサゴ・アサリを主体とした貝層であり、流域に砂泥底の内湾が形成されたことが明らかである。こうした環境の変化は、明らかに縄文海進が直接の原因であったものと推定され、類似した地形で構成されるこの地域の河川部に共通した環境変化であったと思われる。

前期後葉の大木3・4式期には、浦尻貝塚で最初の貝層が形成されるが、この時期から大木5・6式期は、むしろ北原貝塚に同期の資料が多いことから、貝層の形成が北原貝塚にあり、流域の遺跡では北原貝塚に活動の拠点があったように推定される。上流域の宮田貝塚や加賀後貝塚では貝層の形成が終了し、生活の痕跡が縮小されることが確認されるが、これは浦尻貝塚台ノ前南貝層で判明した魚骨や貝にみられる淡水化の動向を反映したものであろう。

**浦尻貝塚の拠点的役割** 浦尻貝塚が宮田川流域の遺跡で拠点的な役割を果たしたのは、前期末から中期にかけての時期と考えられ、この時期は南台地区の北側でローム層の掘削が継続され、くぼ地が形成された。

この時期は、基本的には古宮田湾が砂質干潟を伴った内湾環境にあり、砂泥底に生息するアサリを中心とした採貝活動と内湾に来遊するスズキ・マイワシ・カタクチイワシなどを対象とした内湾性の漁労活動が展開された。北原貝塚ではこの時期の土器資料が少なく、上流の宮田貝塚や加賀後貝塚では集落の形成が認められないなどの点は、この時期の古宮田湾の経済活動の拠点が浦尻貝塚にあったことを物語る。

一方、小高川流域の南岸部には、角部内南台貝塚があり、この貝塚は浦尻貝塚が最も活発であった前期末から中期中葉にかけての時期の土器資料が多く、貝層の形成もこの時期と推定されている。小高川下流域も内湾から潟湖へ環境の変化をした流域と思われるが、角部内南台貝塚は、浦尻貝塚と同時に小高川南岸での拠点的な役割を果たした貝塚かもしれない。

表8 浦尻貝塚周辺の貝塚一覧表

遺跡名		前期	中期	後期	晩期
浦尻地区	浦尻貝塚 (台ノ前・西向・南台地区)		S S S S S		
	浦尻貝塚 (小迫北・南地区)				S S
	北原貝塚遺跡群	S			
	磯坂遺跡				
上浦地区	宮田貝塚	S			
	加賀後貝塚	S			
小高川流域	片草貝塚	S			
	角部内南台貝塚		S		
植畠貝塚		S			

— 遺構・遺物包含層・貝塚の積極的な形成時期  
 — 遺構・遺物包含層・貝塚形成時期  
 - - - 士器の出土あり。  
 S 貝塚形成時期

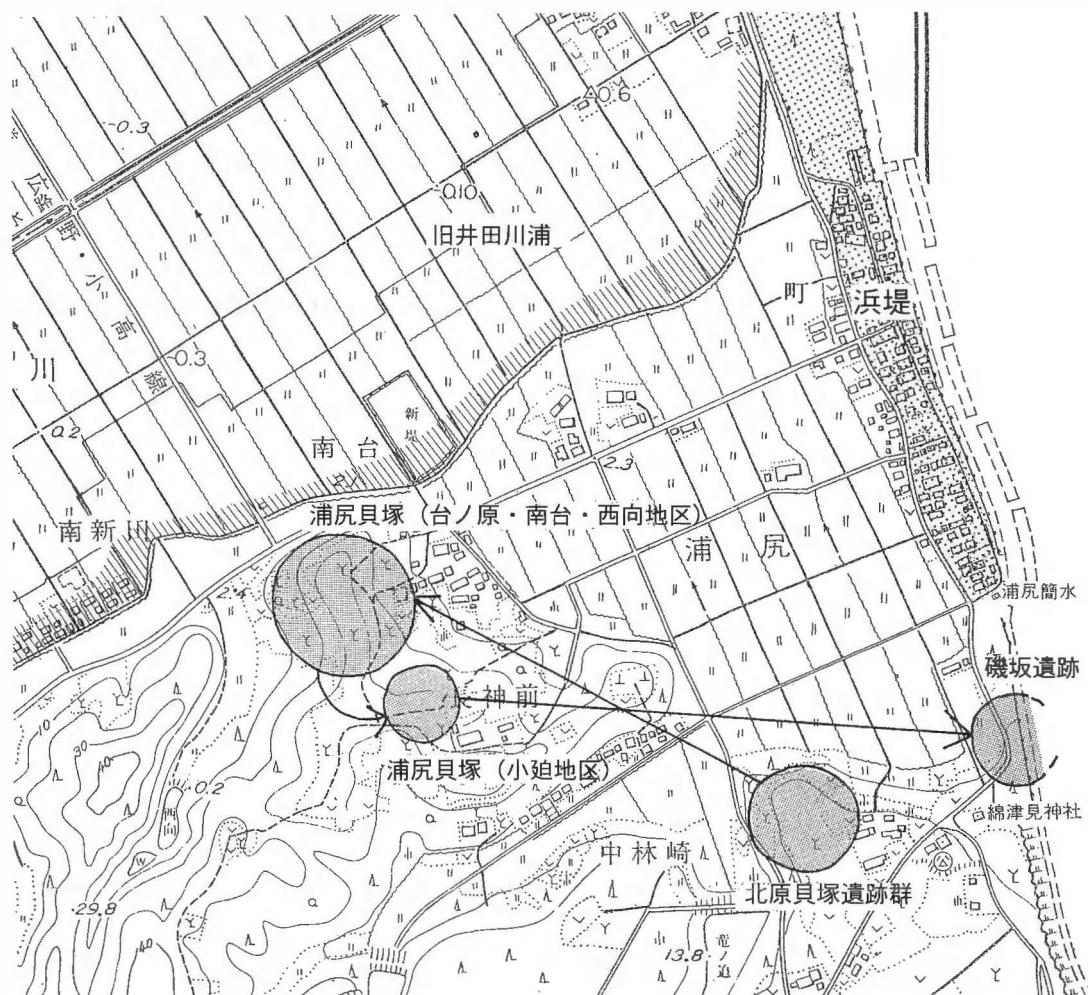


図175 浦尻貝塚周辺での拠点の移動 (S=1/10,000)

**中期後葉の拠点の分化** 中期後葉の大木9・10式期には、浦尻貝塚に複式炉をもった住居が居住域を形成していて、引き続き古宮田湾南岸の拠点的集落を維持していたと考えられる。しかし、この時期になると、北原貝塚の台地部で同型式の大型土器破片が採集されるので、再び北原貝塚にも集落が形成され、拠点的な集落が分化したものと思われる。中期後葉の集落は、県内各地でも遺跡数や住居数の著しい増加があったことが明らかであるが、浦尻貝塚でも小迫南地区に居住区域が成立し、北原貝塚にも集落が復活するのは、この時期の社会全体の動きの中でとらえる必要があろう。

このような動きは、内陸の大富西畠遺跡の大規模集落遺跡の出現とも関連したものであり、その背景に一時的な人口増とそれを支えた食料資源確保の問題があるが、浦尻貝塚ではこの時期に貝層の形成が中断するなど、むしろ水産資源の確保の面では、逆行する動きを認めざるを得ない。

**小迫地区への拠点の移動** 繩文後期になると、浦尻貝塚では南台地区で引き続き集落が営まれ、西向貝層には綱取式期の貝層も形成され、古宮田湾を舞台とした内湾性漁労活動が展開される。しかし、加曾利B式期には南台地区での土地利用が墓域などに転換され、居住区域は、同じ台地でも小迫北地区の平坦部に移動する。そして、小迫北地区を中心とした集落の営みは、後期後葉から晩期中葉まで継続される。一方、これまでの拠点であった南台地区は、後期後葉以降は、遺物も散在する状況になり、生活の痕跡を認めることが不可能になる。

そして、この時期の特色としてもう一つ指摘しなければならないことは、後期後葉以降の遺跡が、宮田川流域のみならず、小高川流域も含めて急減することであろう。少なくとも古宮田湾周辺の遺跡では、後期後半から晩期の遺跡は、浦尻貝塚の小迫北地区と、磯坂遺跡をあげるのみである。この点からみると、浦尻貝塚小迫北地区の該期集落は、規模は小さいものの、この地域における後期後葉以降の拠点的な役割を果たした遺跡と考えられる。

小迫北地区の縄文後期中葉から晩期中葉にかけての集落は、少なくとも掘立柱建物を有する集落であったことは間違いないが、晩期大洞BC式期からは貝層が形成される。しかし、貝層にはヤマトシジミやフナなどの淡水ないし汽水性種の遺存体が多く含まれていて、この時期には、かつての内湾であった古宮田湾が砂州により閉鎖され、潟湖化が進行し、旧井田川浦の原型が形成される環境の変化があったことを物語る。ただし、小迫貝層には大型サメ類・アシカ類・マダイなどの外洋域での漁労活動を推定させる動物遺存体と鈎・ヤス類の刺突具があり、潟湖化する内湾での漁労活動に加え外洋への活発な活動が営まれたことは樋泉らが別章でまとめているとおりである。また、大洞C2式期を中心に、古宮田湾周辺では土器製塩が開始され、生業の多様性がみられるのもこの時期の特色である。

**浦尻貝塚の終焉** 小迫北地区での晩期集落は、大洞A式期までは遺構・遺物が認められ、この時期までは集落が機能していたものと考えられる。しかし、後続型式の大洞A'式は、南台地区も含めて確認できておらず、遺構も検出されなかった。断続的ではあれ、長期にわたり古宮田湾周辺の拠点的集落として重要な役割を果たしてきた浦尻貝塚は、大洞A式期をもって集落の営みを終えたものと評価されるが、その背景にあったものは何であろうか。古宮田湾の急激な潟湖化に伴う環境の変化や、稻作農耕社会への胎動など、複雑な背景があったものと推察される。

小迫北地区の晩期集落が廃棄された後、東に離れた磯坂遺跡では大洞A'式期の製塩土器を多量に含んだ遺物包含層が確認されている。この地域での縄文時代最終末の重要な遺跡であるが、浦尻貝塚の集落が姿を消した後、土器製塩場として新たな役割を担った遺跡ということができる。

## 引用・参考文献

- 新井達哉 2004 『和台遺跡2』飯野町埋蔵文化財報告書第6集 飯野町教育委員会
- 石川隆司 1983 「福島県浦尻台ノ前貝塚における貝類採集活動の復元」『法政考古学』第8集 法政考古学会
- 石川隆司 1984 「縄文時代前期末葉における土器文化接触に関する予察」『法政大学大学院紀要』第12号
- 石川隆司 1988 「浦尻貝塚群の縄文土器(1)－浦尻台ノ前貝塚採集資料－」『法政考古学』第13集 法政考古学会
- 犬塚又兵衛 1890 「磐城国行方郡小高村の貝塚」『東京人類学会雑誌』6-55
- 今村啓爾 1985 「五領ヶ台式土器の編年」『考古学研究室紀要』第4号 東京大学文学部考古学研究室
- 植月学・樋泉岳二 2004 「北原貝塚の動物遺存体」『北原貝塚遺跡群』小高町文化財調査報告第5集小高町教育委員会
- 大竹憲治・山崎京美ほか 1988 『薄磯貝塚』いわき市埋蔵文化財調査報告第19冊 いわき市教育委員会
- 大竹憲治ほか 1990 『双葉・郡山貝塚の研究』双葉町埋蔵文化財調査報告第7冊 双葉町教育委員会
- 大竹憲治ほか 1998 『七社宮』浪江町埋蔵文化財調査報告第12冊 浪江町教育委員会
- 大野延太郎 1901 「磐城線十日の旅」『東京人類学雑誌』16-181
- 小川勝和・小栗信一郎 2003 「三輪野山貝塚」『考古学ジャーナル 509』ニューサイエンス社
- 金子浩昌・忍沢成視 1986 『骨角器の研究縄文編I』慶友社
- 川田強・山崎京美 2001 『小高町内埋蔵文化財調査報告I』小高町文化財調査報告第2集 小高町教育委員会
- 川田強 2001 『角部内南台遺跡』小高町文化財調査報告書第3集 小高町教育委員会
- 川田強 2002 「福島県小高町浦尻貝塚」『考古学ジャーナル 486』ニューサイエンス社
- 川田強・植月学・樋泉岳二 2004 『北原貝塚遺跡群』小高町文化財調査報告第5集 小高町教育委員会
- 木元元治・根本信孝 1977 『順礼堂遺跡』浪江町教育委員会
- 福島大学考古学研究会 1971 『浦尻貝塚』福島大学考古学研究会発掘調査報告書第1冊
- 木幡成雄・山崎京美ほか 1997 『相子島貝塚』いわき市埋蔵文化財調査報告第47冊 いわき市教育委員会
- 齋藤義弘 2004 『宮畠遺跡(岡島)』福島市埋蔵文化財報告書第173集 福島市教育委員会
- 酒詰仲男 1959 『日本貝塚地名表』
- 佐藤典邦ほか 1986 『弘源寺貝塚』いわき市埋蔵文化財調査報告13冊 いわき市教育委員会
- 佐藤憲幸・三好秀樹 2003 『嘉倉貝塚』宮城県文化財調査報告書第192集 宮城県教育委員会
- 相良淳一ほか 1986 『小梁川遺跡—遺物包含層土器編—』宮城県教育委員会 建設省七ヶ宿ダム工事建設事務所
- 志賀敏行 1985 「浦尻貝塚採集の押型文土器について」『Shell Mound』第3号
- 鈴鹿良一ほか 1989 『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XIII』福島県文化財調査報告書第210集 福島県教育委員会
- 高橋憲太郎・三浦千秋 1995 『崎山貝塚』宮古市埋蔵文化財調査報告書44 宮古市教育委員会
- 高橋信一ほか 1994 『請戸川地区発掘調査報告書II』福島県文化財調査報告書第299集福島県教育委員会
- 竹島国基 1971 「福島県埋蔵文化財包蔵地台帳(小高)」
- 竹島国基 1975a 『宮田貝塚』小高町教育委員会
- 竹島国基 1975b 「第一編第一章郷土文化のよあけ」『小高町史』小高町教育委員会
- 竹島国基 渡辺誠ほか 1975 『宮田貝塚』前掲
- 武田耕平ほか 1991 『南諏訪原遺跡』福島市埋蔵文化財報告書第44集 福島市教育委員会
- 古内弘 1979 「福島県(小高町)埋蔵文化財包蔵地台帳」
- 玉川一郎 1984 『山辺沢』飯館村文化財調査報告書第5集 飯館村教育委員会
- 玉川一郎 1986 「福島の縄文期製塩土器」『福島の研究1 地質考古編』清文堂
- 玉川一郎・吉田秀亨 1987 「浦尻磯坂遺跡の縄文晚期土器と製塩土器」『福島考古』28号
- 玉川一郎・吉田秀亨 1988 『角部内南台東貝塚』小高町教育委員会
- 玉川一郎 1993 『荻原遺跡』小高町文化財調査報告第5集 小高町教育委員会
- 西戸純一ほか 2003 『和台遺跡』飯野町埋蔵文化財報告書第5集 飯野町教育委員会ほか

- 芳賀英一ほか 1984 『冴宮西遺跡』会津高田町教育委員会
- 芳賀英一・植村泰徳 1997 「福島県の様相」『第10回縄文セミナー前期中葉の様相』縄文セミナーの会
- 橋本博幸 1991 「泉沢小谷津貝塚」『福島県の貝塚』福島県文化財調査報告書第260集 福島県教育委員会
- 藤谷誠 1995 『請戸川地区遺跡発掘調査報告Ⅲ』福島県文化財調査報告書第323集 福島県教育委員会
- 本間宏ほか 1990 『東北横断自動車道遺跡調査報告7』福島県文化財調査報告書第232集 福島県教育委員会  
ほか
- 松本茂ほか 1991 『東北横断自動車道遺跡調査報告11』福島県文化財調査報告書第243集 福島県教育委員会  
ほか
- 森幸彦 1988 『三貫地貝塚』福島県立博物館調査報告第17集 福島県立博物館
- 森幸彦 1991 「浦尻北原貝塚群」「浦尻北原西貝塚群（竜ヶ迫貝塚）」等『福島県の貝塚』福島県文化財調査報告書第260集 福島県教育委員会
- 森田浩一ほか 2002 『縄文集落 本野原遺跡』田野町文化財調査報告書第44集 田野町教育委員会
- 山内清男 1923 「磐城国新地村小川貝塚発掘略記」『東京人類学雑誌』39巻
- 山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』先史考古学会
- 山内幹夫ほか 1984 『母畠地区遺跡発掘調査報告16』福島県文化財調査報告書第132集 福島県教育委員会
- 山内幹夫ほか 1984 『真野ダム関連遺跡発掘調査報告X II』福島県文化財調査報告書第194集 福島県教育委員会
- 山内幹夫 1989 『国営請戸川農業水利事業遺跡調査報告』福島県教育委員会
- 吉田功ほか 1991 『請戸川地区遺跡発掘調査報告 I』福島県文化財調査報告書第252集 福島県教育委員会
- 吉田秀亨ほか 1983 『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅲ』福島県文化財調査報告書第312集 福島県教育委員会ほか
- 吉田秀亨ほか 1990 『原町市火力発電所関連遺跡調査報告 I』福島県文化財調査報告書第236集 福島県教育委員会ほか
- 吉野高光 1989 「福島県小高町浦尻・竜ヶ迫貝塚出土の貝刃について」『史峰』第14号
- 吉野高光 1991 「植畠貝塚」「大平山貝塚」『福島県の貝塚』福島県文化財調査報告書第260集 福島県教育委員会
- 若林勝邦 1890a 「磐城国新地村貝塚発掘記」『東洋学芸雑誌』7巻110号
- 若林勝邦 1890b 「磐城国宇多郡新地村貝塚発掘ノ話」『東洋人類学会雑誌』6巻